

和辻哲郎とカール・レーヴィット

——二つの「人間」存在論——

福 島 揚

● 序と和辻・レーヴィット比較研究の視座

和辻哲郎 (1889-1960) とカール・レーヴィット (Karl Löwith 1897-1973) は、一九二〇年代末のほぼ同時期に、人間が人と人との「間柄 (Verhältnis)」、「人-間」において、「ヘルソナ」⁽¹⁾「役割」として、存在することを見出した。和辻とレーヴィットは、日本とドイツという互いに異なった状況下でありながら、いずれも、第一次世界大戦によって、それ以前の近代自然科学的・近代哲学的な世界観、とりわけ主客二元論・アトムの個人主義が限界に達したという共通の自覚から思想的に出發している。そして両者は共に、ハイデガーが『存在と時間』(1927)において展開した基礎的存在論から大きな示唆を受けつつ、同時にハイデガーの現存在分析がアトムの個人主義の圏内に囚われてい

ることを看破し、それに対して、現存在が本来、間主体的な「共同相互存在 (Mitmünderssein)」⁽²⁾であることを洞察する。共同世界論、人間学的倫理学を開拓したのだった。

しかし、和辻とレーヴィットは、「間柄 (Verhältnis)」という両者にとつての鍵概念の含意、ひいてはそこに基づく人間世界の把握の仕方が決定的に異なっており、両世界大戦の狭間において思想的に次第に分離してゆく。本稿では、奇しくもよく似た人間存在論に到達し、そして再び分離してゆくことになる和辻、レーヴィット両者の、「間柄」的世界観・人間存在論の比較研究の一端を試みたい。昭和初期の和辻倫理学の構想段階から、体系的著作『倫理学』に至る思想展開⁽¹⁾及びレーヴィットの著作『共同人の役割における個人 (Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen)』⁽²⁾が主な素材となる。

●和辻哲郎の人間存在論

和辻哲郎が『存在と時間』に遭遇したのは、ヨーロッパ留学中のベルリンにおいてであった(82)。和辻は留学以前から既に、第一次世界大戦を近代自然科学・物質文明のもたらした破局として批判し、列強のアジア植民地化やマルクス主義の波及といった戦後世界の情勢の中で、日本民族の進路を模索し続けていた。そして帰国後、いち早く、ハイデガーの現存在分析の持つ近代哲学批判のモチーフを自らの思想の中核に取り入れると同時に、彼の哲学に人間存在の間主体的性格を捉える視点が欠落している事も併せて洞察し、後の倫理学体系の出発点となる風土理論・日本民族論に着手する。

和辻はまず一九二八年十二月の講演「日本語と哲学」において、ハイデガーの解釈学を念頭に置きつつ、日常的日本語の表現を媒介として「人間存在」を捉えようとする。「人間存在」は「世の中にあるもの」、「歴史的なるもの」であり、言語において自らの「vor-onto-logisch」(前存在論的)な「自己理解」を示しているからである(B2-354)。

和辻は、ハイデガーによる現存在の空間性(Räumlichkeit)の議論をふまえつつ、日本語の「私」が単なるデカルト的「Ego」ではなく、「公」(Öffentlichkeit)の中で、「君―臣」「僕―君」といったあり方で「orientieren」(指示)される事を

指摘する(B2-359)。そして、このような「公」としての「世の中」を「間柄」「世に於ける人と人のなか」「ジンカン」「人間」として捉えている(B2-370~371)。

和辻倫理学の鍵概念「間柄」は——テクニカル・チームとしてはまだ確立されていないとはいえ——この一九二八年末に初めて現れる。和辻はハイデガーの現存在分析を踏襲しつつも、それを公共的人間存在——ハイデガーから見れば「世人」(das Man)であろう——の観点から転倒する準備を整えつつあった。

そして、一九二九年四月の論文「風土」においては、彼の「風土」概念が確立される。和辻の「風土」は主観に对立する客体的自然ではなく、単なる地理的決定論の枠には収まらない。「風土」は「我々」に对立する外界ではなく、第一に「志向的体験」であり(B1-396)、さらに「我々」の「自己理解」の仕方である(B1-397)。第一の点は主客二元論を現象学的「志向性」によって乗り越える論点であり、第二の点はさらに間主体性を導入する論点であるといつてよい。

和辻によれば、「道具」の成す指示連関は、終局的に「風土とのかかはりを指示」しているという(B1-399)。彼は「世の中」にあるものとして「風土」と「道具」とに着目し、「風土」が「道具」を規定する事を指摘する(B1-400)。ここで言われる「世の中」は、我々との「かかはり」「中」を意味し、「我々相互の間のかかはり」「世の中が公共的であること」「共在する

人「共にある人間」を前提としている (B1-40)。

この論文「風土」は、講演「日本語と哲学」に見られた人間存在論に環境世界論の視点を導入したものと見てよい。そして、和辻がここで確立した視点は、後で述べるレーヴィットの「共同世界の環境世界にたいする優位性」の視点と殆ど一致するものである。和辻もレーヴィットも、道具連関を単独の現存在に帰着させるハイデガールの考えを否定し、その連関が共同世界を指示する事を指摘しているのである。また、和辻が論文中で、「共にある人」「共にある人」等の、*Mitmenschen* に対応すると思われる言葉を用いている点も目をひく。

しかし一九三〇年に入ると、和辻は「国民道徳論」という形態で倫理学の体系化に着手し、人間存在論・風土論を露骨に全体主義に転化してゆくことになる。この年に執筆されたと推定されている「国民道徳論」構想メモ (B1-477) や、講演原稿の「マルクス主義の倫理的批判」(B2-91)、「人間の風土性について」(B2-205)においては、人間存在を個人であると同時に「全体性」としての世の中・社会・国民等として捉え、全体性の中の「役目」や「資格」として個人が存在するという視点が提出される。「全体性」という用語を和辻が用いるのはこの年が最初であり、人間存在が全体と個の「弁証法」的構造を持ち、歴史的・風土的に具体化するという和辻倫理学の基本思想が確立されるのもこの時点である。

一例として、講演「人間の風土性について」の一部に着目してみたい。和辻はこの論文で人間の「三つの基底」として「世間性」「歴史性」「風土性」を挙げ、その中の「世間性」において、レーヴィットと同様に、人間が日常生活において何らかの「役目」「ベルソナ」において生きているという役割理論を述べている。しかし和辻の場合、こうした役目を「社会団体」「全体性」の下での役目としてのみ考えており (B2-207)、極めて秩序だった役割同士の間柄を想定しているにすぎない。

和辻のこうした人間存在論は、これ以降の『人間の学としての倫理学』(1934)や『風土——人間学的考察』(1935)といった主要著作においても、一貫して展開されてゆく。特に『風土』序文においては、和辻がハイデガーに対して確立した批判の最終的視点が簡潔にまとめられている。ここではハイデガーが「人間存在の個人的・社会的二重構造」を把握せず、現存在を「時間性」に力点をおいて「個人」としてのみ扱い、その結果人間存在の「風土性」を十分に見なかつたことが指摘される (81—82)。

●レーヴィットの人間存在論

レーヴィットは処女作『共同人の役割における個人』において、自らの教師ハイデガーが「存在と時間」で展開した現存在分析をふまえて、和辻倫理学同様、人間学的共同世界、共同相互存在の分析を試みている。

レーヴィットは、ルネサンスと宗教改革以来の近代哲学、とりわけドイツ観念論が、「自然（環境世界）」と社会（共同世界）」に對して「個人の独立」を發展させてきたこと(2)に對する批判をこめつつ、個人が「人格」、「ヘルソナ」、共同世界的「役割」を担って存在していること、世界が単なる環境世界であるに先立って、既にもともと共同世界を意味していること(三~五)、即ち共同世界の環境世界に對する優位性を主張する。

しかし『共同人』(以下このように略記)は人間学的な統一性を保っている背後に、実はレーヴィットの人間学には還元できない意図が見え隠れする。レーヴィットは、世界と個人とのいずれをも、自然と共同世界とに引き裂かれた分裂態として、即ち「二重原理(Doppelprinzip)」(6)によって捉えている。この思考の二重性は、矛盾であると同時に、レーヴィットの哲学全体に一貫する緊張関係として見なければならぬ。

レーヴィットはまず第一編において、フォイエルバッハの人間学をふまえてつづ、この「二重原理」、即ち(1)「感覺主義(Sensualismus)」と(2)「他者主義(Altruismus)」とを提示する。この二重原理は、ドイツ観念論、とりわけヘーゲルに對する二重の批判を意味している。観念論哲学が自我の中に存在を同一化してしまふことを批判し、そうではなく、自我は「感性(Sensualismus)」によって自己の外界の存在・自然に至ることによって初めて客觀的思考を獲得しようと主張するのが「感覺主

義」である。そして、自我はそのような外界の客体の中でも最も本質的な客体である「汝」をよりどころにしていることを示すのが「他者主義」である(6~7)。

レーヴィットは実はこの二重原理を通して、人間が自然的世界と共同世界に分裂した「二重性格」を持つという『共同人』全体の潜在的モチーフを表現している。第二編第一部では、人間は共同世界の構成員としてのみではなく、とりわけ死(Tod)の自覚を通してマクロコスモスとしての自然に属する個人として捉えられている(22~23)。

レーヴィットは、第二編第二部に於いて、「人間と世界との明瞭な統一」(8)としての共同世界の内部構造に視野を絞り込む。ここでは共同世界の内部での、「間柄」と「個人」という第二の緊張関係が浮上してくる。

レーヴィットによれば、「個性(Individualität)」を持つ「人」のみが、「物」と違って「相互的(zueinander)」で「相互再帰的(korrelativ)」な間柄を持つことができる(62)。しかしこのような間柄の特質、即ち「各自が他の者を考慮することにおいて自分自身を規定する」(71)という「二義性」は、間柄そのものが「イニシアティブ」をもつような事態、「二義性の反映」(82)の連続としての「間柄の独立化」(82)を引き起こす可能性があるという。ここではいわば、間柄の中に個人が埋没し解体されてしまうような状態が出現する。この「間柄の独立化」のケ

ースとしてレーヴィットが注目するのが、ピランデルロの演劇である。⁵⁾

レーヴィットは『共同人』のほぼ半ば(823)に於いて、イタリアの劇作家・小説家ルイジ・ピランデルロ (Luigi Pirandello, 1867-1936) を取り上げている。レーヴィットが最も注目する戯曲『御意に任ず』⁶⁾ は、或る都市に転動してきた素姓の知れない三人家族と、それを取り巻く人々の物語である。

この三人家族は、ボンザ夫妻と、ボンザ夫人の母フロオラ夫人である。町外れの家に住むボンザ氏は、夫人をその最上階に、片やフロオラ夫人を別のアパートに住まわせている。ボンザ氏とボンザ夫人との、ボンザ氏とフロオラ夫人との間には行き来があるが、ボンザ夫人は外出せず、どういいうわけか、母親とは最上階から庭に吊された籠を使って文通している。また彼らの出身地の村は地震によって全滅してしまい、彼らの素姓を確認する人物も記録も存在しないという。

人々は彼らの正体を明かそうとして、フロオラ夫人、ボンザ氏をそれぞれ呼び出す。フロオラ夫人によれば、ボンザ氏は妻に対する独占欲のあまり母と娘を文通しかできないようにしているのだという。一方ボンザ氏によれば、フロオラ夫人の本当の娘リナ(ボンザ氏の前妻) は死んでしまい、気が狂った彼女は、現在の彼の二番目の妻を自分の娘と思ひ込んでいたのだが、妻ジュリエットは彼女の妄想を壊さぬよう演技しているのだという。また、

ボンザ氏とフロオラ夫人が同時に居合わせても、両者は互いの思ひ込みを壊さないように触れ合うために、対立が起きない。

なおも事の真実を知ろうとする人々は臆知事に頼み、彼の命令によって強引にボンザ夫人を連れ出し、彼女自身の口から真相を聞き出そうとする。ところが彼女自身は、自分にとって自分とは「誰でもない人間」であり、自分は「人が信じてくれる、その人間」なのだという「真実」を語り、物語は幕を閉じる。レーヴィットの言葉を借りるなら、「互いに一つの間柄を持つ人々の『現実』は、互いに無関心な客体同士のような類のものでも、そのような客体の様に近づきうるものでもないこと」、そして「彼らが互いに属し合っていて、彼らの二義的に反映し合う間柄を無視すれば、一方の者と他方の者の振る舞いは全く理解されない」こと(86)が、最後に示されたのである。

しかし、レーヴィットにとつて、「人間が生の間柄に於いて、純粋の裸の個人としてではなく、間柄的有意義性の形で——ベルソナとして——現れる」ピランデルロの哲学は、「間柄の独立化」の端的な形態を描いているに過ぎない(88)。レーヴィットは、個人は間柄に対して「関わり合う」ことができ、単に「所属者として要求に全くとらわれてしまうのでなく」、「程度の差こそあれこれらの要求に応じるのである」(100)と反論し、間柄の内部に於ける個人の相互的独立性、「イニシアチブ」を強調する。ここでレーヴィットは、間柄の中で生きる個人が、世人の認証や対他

存在に蹂躪されてしまう事態に対して、違和感を表明しているように思われる。

「実存する個人として、それ故に『共同人』であること、この根本的にして重大で困難な「役割」を持ち、演ずること——この「演技」が、各人に自分が何者であるかを教える「生」の真剣さとなる。」(180) という言葉によって、『共同人』は締め括られている。

●二つの人間存在論の交錯・離反

和辻がレーヴィットの『共同人』を批評した唯一の箇所は、一九三七年の大著『倫理学』の「序論」である。和辻はそこで、ハイデガーの弟子レーヴィットが、『存在と時間』において「人と道具の交渉」の陰に隠されていた「人と人との交渉」に注目し、「世の中」をその側面から説明しようとした点を評価する。和辻は、レーヴィットが「世の中を人の間柄」として分析する「アントロポロギー」「倫理学」を行い、「Welt」を人間学的に把握した点を評価する(10-19~20)。

しかし和辻は、日本語の「世の中」「世間」はドイツ語の「Welt」の意味を一層顕著に示し、しかもそれらが「主体的共同存在の時間的・空間的な性格を共に把握しているという点」で、「Welt」に対して優越性を持つと述べている。即ち「世間、世の中とは、歴史的・風土的・社会的なる人間存在である。」という

(10-20~22)。

人間存在を風土性(空間性)と歴史性(時間性)との両側面から、トータルに把握しようとした和辻倫理学体系から見て、人間存在の空間性にしか着目していないレーヴィットの処女作は、十分なもの映ったであろう。また、全体と個の弁証法という和辻倫理学の観点に立つ時、『共同人』の議論は、我々といういわば最小単位の「間柄」にしか目を向けていない傾向があり、社会や民族といった大規模な共同体の構造に対する考察が欠けていることも否めない。

しかしながら、和辻とレーヴィットは共に共同世界を主題化しつつも、その志向が完全に対立していることは動かし難い事実である。和辻は単独的な現存在を非本来的、日常的共同世界を本来的と考え、我々という間柄をも公共的人間関係の中に配置しようとする。しかしレーヴィットは、その共同世界の中に我々という間柄が吸収され尽くすことに対しては、一貫して懐疑的な姿勢を保っている。

また、和辻は『共同人』を人間学的「風土」論へと改釈したことによって、レーヴィットが曖昧な形ではあれ、峻別しようとした自然的世界と共同世界とを、再び「風土」共同世界の内部に併呑することになった。全てを人間学的に把握しうる共同世界の中に呑み込ませようとした和辻と、共同世界には回収しえないコスモスを同時に見つめようとしたレーヴィットとは、決定的な

世界観の相違があったことを銘記しておきたい。

両者は、一九二〇〜三〇年代の日本において一瞬のニアミスを起こした後、それぞれの世界観が指し示す、全く相異なる運命へと分かれていくことになる。

※本稿は、1994年10月15日の日本倫理学会第45回大会での筆者の自由課題発表「共同世界とその彼岸―カール・レーヴィットの二重原理」と、行論の必要上、内容的に重複する箇所があることをお断りしたい。

(1) 『和辻哲郎全集』全25巻と別巻2巻(岩波書店、1991〜92年)からの引用は、巻数とページ数を(10-110)・(B2-230〜231)等と記す(B1, B2は別巻)。

(2) *Das Individuum in der Rolle des Mimenschen* (München, Drei Masken Verlag, 1928.) からの引用は、ページ数を節数のみを(23)・(S20)等と記す。

(3) L. Feuerbach, *Grundsätze der Philosophie der Zukunft* (L. Feuerbachs Sämtliche Werke II, Leipzig, Wigand, 1846〜66.)

(4) この点に關しては、同年のレーヴィットの論文 *L. Feuerbach und der Ausgang der klassischen Philosophie* (Sämtliche Schriften, J. B. Metzlersche Verlagsbuch-handlung, 1981〜86.) を参照。

(5) 廣松渉「人間存在への覚書Ⅱ―間主性主体性と役割存在」(『現代思想』1974年8〜9月、青土社)に於けるピランデルロ・レーヴィット論を参照。

(6) 岩田豊雄訳『ピランデルロ名作集』、1958年、白水社。
(やくしま・よう、倫理学、東京大学大学院)